

ひかりのこ

3月園便り

聖ミカエル幼稚園
2017年2月17日

月主題：すすんで

「今大切なこと」

先日乳幼児の発達に関する研修会に参加しました。内容は、3、4、5歳児というよりは、0、1、2歳児を対象としていたが、とても勉強になりました。講師は札幌市内の保育園の園長先生です。きっと今までに何百人という赤ちゃんを預かってきたことでしょう。その経験に基づくお話が、私自身が最近感じていたことや、大学院で学んだことなどとも合わさって、「そうそう」「やっぱりそういうことなのだ。」と頷くことがとても多かったです。

私が今日お伝えしたかったのは、現在大学院の自主ゼミで、教授や仲間とともに読み進めている「アンリ・ワロン」の考えです。人間発達思想の古典である「アンリ・ワロン」の考えは現在見直されてきています。ワロンによると、人間は、生まれた時から自分の世話をしてくれる人に働きかけたり、働きかけられたりしながら、「他者の存在」を意識して、「自我一私」を形成していくというのです。

研修会では、「最近のお母さんの中には、子どもをずっと抱っこしたままで、子どもの目を見てお話をしない方がよくいる。」とおっしゃっていました。お母さん方に理由を聞くと「まだ話せない赤ん坊に話しかけても、周りに変に思われる。」「忙しくて。」と返ってくる、ということです。

ミカエル幼稚園には、園児やいちご組の弟、妹が、毎日たくさんやってきます。あやす機会があると、私は「チャンス！」とばかりに赤ちゃんに話しかけます。2か月ぐらいでも目を見て話しかけると、こちらの働きかけに応じて「あーあー」と答えてくれます。小さくても心のキャッチボールができるのだ、と実感します。

まだ0、1、2歳のお子さんがあるご家庭は、お兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒に、ぜひ赤ちゃんに話しかけてあげてください。抱っこも外の景色が見えるように工夫して、お母さんと一緒に指差しをしながら「お空がきれいね。」「かわいいスズメちゃんね。」と同じものが見えるようにすることもお子さんの発達にとっても大切です。

3歳以上のお子さんは、たくさんお話をするようになりますが、よく聞いて、そのお話の世界と一緒に楽しむようにしましょう。言葉のキャッチボールが、子どもの心を育てます。

私は学ばば学ぶほど、乳幼児期が、人間の一生の中でいかに重要

な時期かを感じます。私たち保育者は、それを肝に銘じるとともに、お父さん、お母さんに発信していかななくては、と考えています。

園長 渡部良子

キリスト教保育

「救い主は ろばに乗って」

先日、こどもたちとの礼拝で、イエス様が十字架につけられる直前、ろばに乗ってエルサレムに入城したというお話しをしました。救い主は、スマートで力のみなざる馬ではなく、ゆっくりな、かっこの悪いろばに乗っていた。素敵なイエス様を想像していた人々はその姿に驚き、何かおかしいと思いつつも、有名な人なので、取りあえずしゅろの葉を振って迎え入れるという場面です。

私は、もし、イエス様が私たちの幼稚園に来るとしたら、やっぱりかっこいいスポーツカーではなく、みなさんが乗る三輪車に乗ってくるかもしれないよ、と自信たっぷりにいいました。すると、こどもたちから、すかさず、「ないないない」という超現実的な反応が返ってきました。あっぱれな問の取り方でした。同時に、いつの間にかこどもたちは、聖書のお話しを、自分が今いる場所で、かっこ付きで受け止めていることを感じました。これはもう大人の感覚です。3年間、聖書のお話しを聞くうちに、現実の生活と幼稚園で聞く聖書の出来事を、ちゃんと区分けしてバランスをとって聞いている。そんな成長を感じさせるひとこまでした。

でもいつか、ろばに乗るイエス様の姿が、大切なメッセージを含んでいることを思い出して欲しいと願います。生きていくと、死ぬほど恥ずかしい思いをしたり、みじめな自分の姿に愕然とする時が必ずあります。その時、覆い隠そうと頑張り過ぎたり、無理に忘れようとせずに、ありのままの自分を受け入れ、イエス様から元氣をもらって欲しいのです。そうすればきっと心は晴れるでしょう。イエス様は語りかけます。「大丈夫、わたしもろばに乗って笑われ、そして十字架に向かったのだ」と。

チャプレン 下澤 昌